



あの雑踏と喧噪はどこへいつてしまったのだろうか。日本中の街から外国人観光客が消えて2年となる。政府は2020年の東京オリンピック（実際は2021年の開催）には「おもてなし」で4000万人の観光客の来日を目標としていた。

外国人観光客の増加を加速したのは円安の効果が大い。訪日観光客に対してすべての商品への消費税免税適用を拡大した効果も後押しした。日本は治安が良く人々は親切で礼儀正しいと、日本を訪れた外国人観光客が口にする定番の台詞だが、近年新たな評価が加わった。「日本の品物は質が良いし、すべて

社会経済の衰退と心の変調

—コロナ禍からの解放—

情報広報部 山科 賢児

が安い」と。それはこの30年間日本人の所得が上がらず、海外諸国の給与水準が上がったからに他ならない。

空前のインバウンド景気で京都などの有名観光地はもちろん、狸小路を歩くと数多くの土産物店やドラッグストアにはアジア系の観光客でごった返し、日本の高度成長期の日本人が海外でブランド品を買いあさっていた当時を彷彿させた。日本の国内経済は活気を取り戻したかのように思えたが2019年末、中国で新型コロナウイルスが発生し、世界にコロナパンデミックが起こり、突如インバウンドは蒸発した。多くの死者を出したデルタ株に代わって現

在はオミクロン株が感染の主流となっており、感染状況は高止まりが続いている。しかしオミクロン株の特性を考えるとまん延防止等重点措置の出番はなく、空気感染であればマスクやパーテーションなどの感染対策は見直されるべきだろう。感染症法の2類から5類への移行も検討されている。3回目のワクチン接種が進んでいると同時に、多くの人々はオミクロン株の正体とワクチンの実態を理解してきたようだ。従来の感染対策から卒業し、日常を取り戻す時が来た。

2022年4月、日本は未だに自由に渡航できず「鎖国」状態に近い。感染対策のマスクに黙食、会話の禁止は人間に大切なコミュニケーションを断ち切り、刺激のない単調な毎日の生活は不安を生み、意欲の低下と諦めを生じさせた。2年間コロナと対峙した心のダメージは大きくそう簡単に戻りはしない。

コロナ禍におけるストレスは、以前からあった社会に対する不満や不安をさらに増加させ、分断や格差による対立をより先鋭化させた。相手の自由を踏みつける言動や自らの行動に抑制が効かなくなり、お互いが監視し合う人間関係や同調圧力も顕著となった。ストレスの発散には、それを受け止め共有する存在が必須なのだが、多くの場合は孤独な環境にじっと耐え忍ぶしかない。やがて寛容さや心の安定を失い、行き所のない焦りやイライ

ラ感や突如他人に向かう。テレビの旅番組やYouTubeで外国の様子を見ても、五感を刺激する本物の旅とは全く違う。非日常を実際に体験するのが旅の醍醐味であり、心と体に新鮮な刺激を与え活性化させる。経済誌エコノミストが発表している2022年のビッグマックス指数は、円の貨幣の実力を知る簡単な指数である。近年の円安のためか日本のビッグマックスの値段390円は57カ国中33位。一番高いスイス（894円）の半額以下で、アメリカやユーロ圏や韓国、中国より安い。世界各国の購買力平価の1人当たりGDPは、日本は30位であり日本や日本は豊かな国と言えない。

日本は歴史的に国や社会システムの改革を自らの意志と行動で実現した経験がなく、外圧が常に社会構造や価値観を激変させる引き金となつていく。日本と異なる常識や文化に刺激を受け、自分の考えの外に出るアウトバウンドも新型コロナウイルスによる心の変調を解き放つ解決方法となる。「何でも見てやろう」と身近な東アジアや東南アジアの国々をまず訪れてみよう。空港に降り立つとその空港のスケールと人種の多様性に驚き、日本が東アジアの端に位置する何のことはない国と実感するはずである。しかし海外に長年暮らしていても、心が落ち着き安心して暮らせる国はやはり故郷日本であると語る日本人がほとんどである。

日本には豊かな自然や歴史の中で育んできた伝統文化や食文化、地域の多様性など外国人をも魅了するものが数多くある。世界の潮流を知り日本の凋落を受け入れつつ、身の丈に合った生き方を具体化するのにはコロナ禍の今なのかもしれない。